

私 部 城 跡

－発掘調査概要報告書1－

1995年3月

交野市教育委員会

私 部 城 跡

—発掘調査概要報告書1—



1995年3月

交野市教育委員会

序 文

交野の地は、数多くの遺跡を残しております。学界上名高い縄文時代早期の神宮寺遺跡をはじめ、前期古墳の森古墳群、長さ8メートルを越す巨大木棺を出土した車塚古墳群等市内のほぼ全域にわたって遺跡がみられます。

しかし、中世以降については近年発掘調査によって徐々に解明される段階であり、これから調査が待たれる所です。

今回調査を致しました私部城は、戦国時代末期に活躍したとされる安見右近の居城とされ、大阪府下残り少ない平野部に城を築く（平城）の形態をもつもので、比較的残りもよく保存の望まれるところです。調査の結果、狭小な面積ではありましたが、これまでの概念を覆すような新しい発見をすることもできました。これらの結果を踏まえた上で保存整備していくことが最良の方法かと存じます。

このたびの調査でお世話になりました関係者各位に厚く御礼申し上げますと共に、今後とも文化財行政に一層のご理解、ご協力を願いますようよろしくお願ひ申しあげます。

平成7年3月

交野市教育委員会
教育長 永井秀忠

例　　言

- 1、本書は、交野市教育委員会が平成6年度、実施した、交野市私部5・6丁目に所在する私部城跡の発掘調査概要報告書である。
- 2、発掘調査及び整理作業は平成6年12月9日～平成7年3月31日の間行った。
- 3、発掘調査は交野市教育委員会の委託を受けて（財）交野市文化財事業団が実施し、小川暢子が現地を担当した。
- 4、本書の執筆及び編集は小川が行った。また調査並びに本書の作成に当たって齊藤登美子、大場一、柏野勝重、木佐木和夫、安岡正弘の協力を得た。
- 5、本書で使用する色調は、『新版標準土色帳』（農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所　色票監修）による。また、挿図の方位は磁北を示す。
- 6、調査の進行に当たっては、北村七良氏、樋利夫氏より調査地使用を快く承諾していただき且つ協力していただきました。又、調査及び整理に当たっては米原町教育委員会中井均氏、（財）八尾市歴史民俗資料館小谷利明氏より御指導・御助言をいただきました。上記各位に対し深く感謝、御礼申し上げます。

目 次

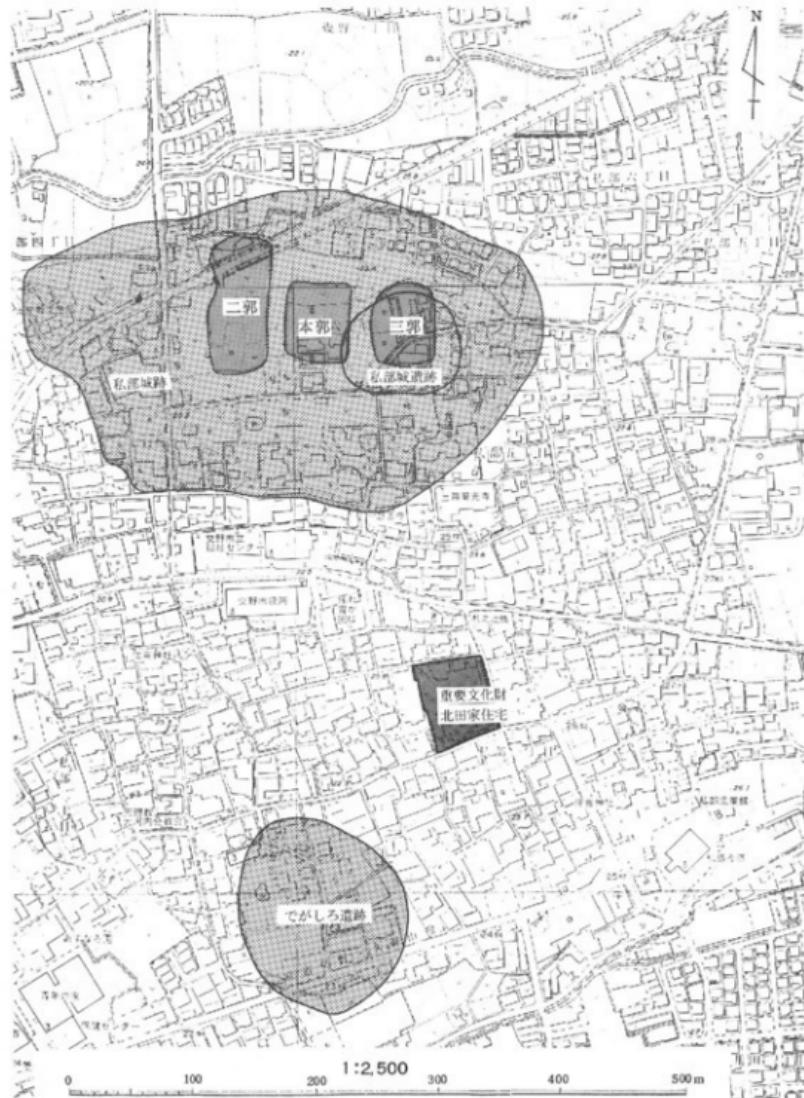
序 文

例 言

立地と環境	2
調査の概要	
調査に至る経過	3
調査地の設定	4
各調査地の概要	4
出土遺物	9
まとめ	18

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	1
第2図 私部城跡周辺図	2
第3図 第2トレンチ土壤1南側断面概略図	6
第4図 第2トレンチ平面図及び断面図	7
第5図 第3トレンチ西側断面実測図	8
第6図 平瓦・軒丸瓦・軒平瓦実測図	12
第7図 丸瓦実測図	13
第8図 丸瓦実測図	14
第9図 平瓦実測図	15
第10図 埼・面戸瓦実測図	16
第11図 その他出土遺物実測図	17



第1図 周辺遺跡分布図

立地と環境

生駒山脈から派生する交野山の急峻な西斜面は、麓の神宮寺集落から西に向かって緩やかに台地を形成している。市内におけるこの台地の北端には免除川、南端には前川が流れ、共に徐々に間隔を広げながら市内を南北に流れる天の川に合流する。やがてその流れは大阪と京都を結ぶ淀川へと通じるのである。

この台地は更に両者の中間、現在交野市役所の前の道路付近で一度低くなり、台地を2分している。明治の初め頃にはこの付近に池があり、さらにこの道路沿いに川が流れ舟を出していたという話もある。今、この旧河川敷を復原してみると図のようになる。私部城はこの2分された台地の北側に属する。

また西側は交野郵便局の西が台地の先端部分となっており、ここから急な下り坂となる。この低地部分は長砂（なごさ）と小字名で呼ばれ、当時は天野川の旧河川敷であったことが伺える。つまりこの城は自然地形を利用して、舌状台地先端部に築かれたことがわかるのである。

さて、私部城跡は、周辺遺跡分布図をみてもわかるように私部城遺跡と重複している。これは、昭和48年度に行われた緊急発掘調査によって発見された遺跡で、今回の調査地より東南方向に約165mほどいった地点で地表下約20cmで包含層に当たっている。この地層より弥生時代中期の土器片及び石器が出土している。



第2図 私部城跡周辺図

調査の概要

調査に至る経過

交野市は近年宅地開発等が急激に増加してきた。その中でこれまで私部城跡は大阪府下における中世の平城としてその姿を非常に良く残している数少ない遺跡として残存してきた。しかし、私部城周辺も例外なく開発の波が押し寄せてきている。過去5度の発掘調査もすべて開発に伴うものである。都市部ではめったに見られなくなってしまった形態の城を保存しようという動きがでている。そこで、保存運動の前提としてまず、遺跡が文献上に出てくる私部城であるかどうか、また城郭内に遺構が残存しているかどうか確認することが必要である。そのための資料を得る目的で平成5年度から調査を実施している。初年度である平成5年度は、現況を把握するため航空写真を撮影し、主郭部の測量図を作成した。周辺部をあわせた測量図は来年度実施する予定である。以下にこれまで行われた発掘調査の概要をまとめておく。

- 1 昭和40年5月 遺跡発見 町道私部城線建設工事に伴う調査
焼けた礎石、布目瓦、土器片が出土。
- 2 昭和44年7月 水道管、配水管敷設工事に伴う調査。弥生時代中期の石包丁、土器片が出土。(1)
- 3 昭和52年 大阪市水道道建設工事に伴う第2郭の調査。
- 4 昭和61年 交野郵便局の建て替え工事に伴う調査。地表下約1mで青灰色砂層となる。遺構、遺物は発見されなかった。
- 5 平成2年 本郭の南接地。地表下約40cm地山。遺構、遺物なし。
特に、2の調査成果については報告書が刊行されている。これによると第3郭上に通した全長34.5mの道路掘削の際の法面を検討し、最も道路の屈曲の激しい地点で15mにも及ぶ黒色の遺物包含層が地山との間、深さ約1mにわたって検出された。後に『交野市史 考古編』の中で、水野正好氏はこの包含層に注目し、溝の一部つまり弥生時代の環濠集落の可能性を指摘している。

(1) 交野町教育委員会 私部「城」弥生遺跡調査書 1970

調査地の設定

私部城は、連郭式とよばれる郭の3つ連なった形式の城である。このうち第3郭はすでに住宅等が建ち並び、城本来の地形を伺い知ることは出来ない。第2郭（字てんし）については一部竹林、畠地となっているが大半を交野市職員の駐車場が占めているため地表下に関しては掘削等の影響がでない。そのため本郭（字しろ）を調査対象とした。また、第2郭より南約75m、私部城線の更に南側に本丸池と呼ばれる池がありL字状を呈するため、堀ではないかと思われてきた。しかし第2郭と池の北端の間が75mも空くというのは城に付属する堀にしては間隔が広すぎる。これが堀であるならば二重堀の可能性もでてくるので主郭部斜面より平坦部にかけてトレンチを設定し、堀の有無を確認することとした。

各調査地の概要

主郭部の調査

本郭は城域の中央に当たる郭で、東西約50m、南北約60mを測り、ほぼ正方形の平面形を有している。私部城線より主郭北側へ続く道を登ると途中92m付近で段差が生じる。その段差を更に登ると中央よりやや東よりに室町時代後期以降の作とされる阿弥陀立像（石仏）がある。この石仏の東2mの地点から南に向かって、東西1m南北7mのトレンチを設定、第1トレンチとした。またこのトレンチより南2.5mの地点で、東西25m南北1.2mのトレンチを設定、第2トレンチとした。

第1トレンチ

地表下から30cmまでが耕作土。その下24cmまでが黄橙色砂質土層礫混じりで、炭や黄橙色の1~20cm大の砂質土をブロック状に多く含んでいる。トレンチ北端より約1mで北に向かって落ち込み70cmの間テラス状に緩やかに下った後、急激に落ち込む。おそらくこの先是郭の傾斜面になると考えられる。

第2トレンチ

地表下から20cmまでが耕作土。その下70cmまでが黄橙色砂質土層で、これは第1トレンチの土層に等しい。第3層目は黄橙色粘質土層で、厚さは2、3cm程度、第4層目は黄褐色砂質土層で炭を多く含んでいる。この層の厚さは20cmほどで西へ移るに従って幅広くなっている。第5層目は灰黄褐色砂質土層で厚さは狭いところで

20cm、広いところで 100cmを測る。ピット 6 では 2 層に分かれ、ピット内の埋土は約60cm、灰褐色粘質土層である。この下はにぶい黄橙色粘質土層白礫混じりの地山となる。特に第 5 層は東より約17m付近から徐々に落ち込み、更に 1 m西へいったところから急激に落ち込む。約21m付近で土壤 1 を検出したため、間に珪をおきトレーニングを 2 つに分けた。

検出遺構

第 1 トレーニングにおいては、遺構は検出できなかった。

第 2 トレーニングにおいては、以下の通りである。

第 2 トレーニングは全部で 5 層より成り立っているが、このうち遺構を検出したのは 3 面である。

第 1 遺構面

第 1 遺構面は、元々茶畠部分であったため、茶の根によって荒らされ、面の凹凸は激しかった。この中で、第 2 トレーニング西端より約 2 m 20cm の地点で土壤 1 を検出している。東西径 1.9m ほどであるが、この遺構はさらにトレーニングの北側に続いていると思われ、南北径を出すことはできない。この土壤は、大きく上下 2 層に分かれる。

上層は、淡黄色砂質土層で、東西径約 2.1m、深さ 0.5m を測る。

下層は、多量の石と瓦を出土している。東西径 1.58m、深さ 0.95m を測る。この下層は更に 3 層に分かれ、1 層目は黄橙色砂質土層で約 30cm ほど水平に堆積した後、2 層目の黄褐色砂質土層（白色砂粒を含む）が粘土をブロック状に含んで約 35cm ほど堆積する。3 層目は灰色砂質土を 25cm 大のブロック状に含んだ後、灰色砂質土層が 35cm ほど堆積する。

下層で出土した石や瓦は、下層全体まんべんなく出土している。出土した石は全部で 562 個で、そのうち大 218 個、小 344 個出土している。この内の大部分の石が焼成を受けたと思われ、赤く変色している。これらの石は投棄されたと考えられるが、この下層の底部から石塔の台座の他、合計 3 点の扁平な石を敷き詰め、その周囲にこれらの石を固定するかのように 5 ~ 10cm ほどの河原石や瓦を敷き詰めた遺構を検出した。

石塔の台座は、上面を東向きに立てたような形で出土している。土壌1の掘り込み自体は、この石の下までであるが、これより下は灰色砂質土層炭混じりが約40cmほど続き地山面に至る。この土壌1によって第2トレンチ全体にわたってみられる第2層がとばされたことになる。

第2遺構面

表土下約40~50cm、第5層上面で畝状遺構を検出した。幅約20~30cm、深さ約10cmの畦を全部で5本検出した。ほぼ等しい間隔で並んでおり、畑地として利用されていた可能性がある。

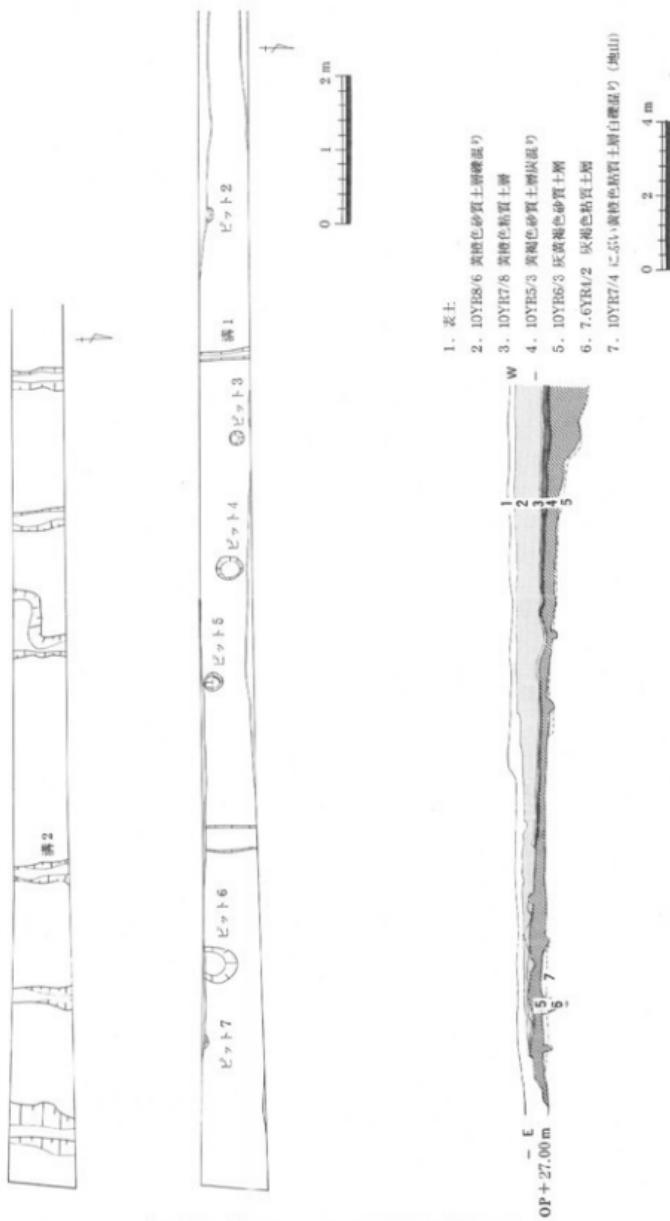
第3遺構面

表土下約70~80cm、地山層を掘り込んだ状態で柱穴および溝状遺構を検出した。柱穴の数は6、溝は2本である。第2トレンチ東から西に向かって遺構面は下がっていく。柱穴は大・小2種に分かれ、ピット4は直径約50cm、深さ約60cm、ピット6は直径約30cm、深さ約45cm、ピット2・3・5・7は直径約25~30cm、深さ15~20cmである。

ピット2とピット3及びピット5とピット6の間にはそれぞれ溝状遺構が検出されており、溝1は幅25cm、深さ8~10cm、溝2は幅40cm、深さ20cmを測る。おそらく掘立柱の建物が建っていたと思われるが、トレンチ面積が狭小なため、建物を復原することはできなかった。



第3図 土壌1南側断面概略図



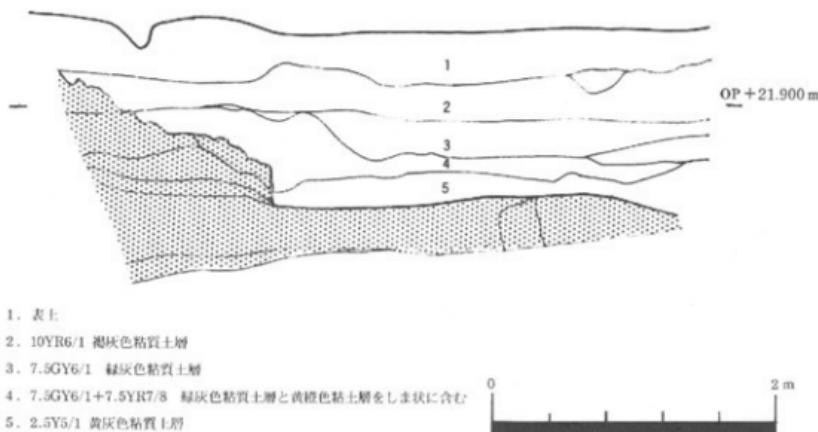
第4図 第2トレンチ平面図及び断面図

堀の調査

本郭北側斜面で、比較的残りのよい部分を選び、隣接する北側の水田に向かってトレンチを設定。斜面部 6.5m × 1.5m、平坦部 6.0m × 2.5m。

斜面部は、竹林となっているため表上下は、明黄褐色砂質土層が約30～50cmの厚さで攪乱をおこしながら堆積する。その下20～30cmは上部から転落した土、黄橙色砂質土が堆積し、その下は第1トレンチでみられた明黄褐色砂質土層へと続く。斜面の角度はおおよそ40度である。

平坦部は表土の掘削と同時に大量の地下水が湧き出しトレンチの壁面が崩れるなど危険なため写真撮影及び簡単な断面図を作成した後すぐに埋め戻した。第5図はこの時作成した断面図である。これによると表土下約35cmで、傾斜面が現れるが堀状の落ち込みは認められない。自然堆積によるもので、泥田状のものが広がっていたと推測できる。この傾斜面は先の傾斜部でみられた明黄褐色砂質土より5層も下である。



第5図 第3トレンチ西側断面実測図

出土遺物

本年度調査の内、出土遺物は主に第2トレンチより出土している。瓦壇類がほとんどであるがいずれも破片で完形ではない。以下、主な遺物について述べておく。

瓦壇類

A. 軒丸瓦 第2トレンチ土壙1より出土

合計2点出土している。

1. 上面が扁平化した左廻りの三つ巴文を配し、尾部は約半周するが圓線はない。外区内縁には小振りの珠文が9個確認できる。接合法は一部カキメを確認することができる。瓦当外区外縁と側面にヘラ削りを施した後ナデている。瓦当範にハナレ砂を用いる。範はあまり良好ではなく、文様がつぶれている。胎土は1mm前後の白色砂粒及びくさり礫を多く含み、焼成はやや甘いが色は灰黒色を呈す。(9)。

2. 細片のため型式不明。範はあまり良好ではなく、文様がつぶれている。胎土は砂粒を若干含む程度で焼成は良く、焼しが入り灰黒色を呈す。(7)

B. 軒平瓦 第2トレンチ土壙1より出土

合計2点出土している。

1. 3弁の花文を中心飾りとする均等唐草文軒平瓦である。唐草文は、第1～第3子葉が同じ向きであった後1回反転する。圓線を有する。範は削りなおしている。瓦当範にはハナレ砂を使用。凹面前縁を面取る。段頸。胎土は若干の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は黒灰色を呈す。(10)
2. 中心飾りを欠く。脇唐草は二重唐草で4反転する。瓦当面はハナレ砂使用。凹面前縁を面取る。胎土は1～2mm大の砂粒を多く含む。焼成は軟で色調は灰色を呈す。(8)

C. 丸瓦

第2トレンチ土壙1及び第3トレンチから出土している。

土壙1からは合計54点ほど出土しているがいずれも完形ではない。数点のみ図化することにした。土壙1出土の丸瓦は大きく4種類に分類できる。

1. 凹面布目・もしくは布目またはコビキAの痕跡の残るもの。凸面はヘラ削りを施している。(12, 14, 16, 19, 21)

2. 凹面布目コピキAの痕跡の残るもの。凸面はヘラ磨きを施している。(17.18)

3. 凹面布目。凸面に繩目叩きの残るもの。(15.20)

4. 凹面布目。凸面にナデを施しているもの。(11)

第3トレンチの瓦は(22)で凹面縦方向の工具痕。凸面ヘラ削りがみられる。

D. 平瓦

第2トレンチ土壌1及び第3トレンチから出土している。

コンテナ数では合計5箱程度出土しているが、ここでは時期のさかのぼると思われる瓦について説明しておく。

1. 凸面は格子目叩きを施し、凹面に布目痕が認められるもの。(1)

2. 凸面は格子目叩き、凹面に工具痕が認められるもの。(2)

3. 凸面は格子目叩き、凹面はナデ、縁に削りがみられるもの。(4)

4. 凸面は繩目叩き、凹面にヘラ削りが認められるもの。(3.5.6)

土師皿

図化したのは5点。いずれも破片である。(37~41)

瓦質土器

A. 盤

外面上部に指圧文をもつ突帯を貼付する。その下に櫛描き波状文（単位9/cm）を1条施す。底部外縁にヘラ削りを施す。(45)

B. 鉢

少々外傾気味に直立する鉢で、底部外縁に段がめぐる。内面には指頭圧痕がみられる。またハケ目もみられるが磨滅気味で単位等は不明である。(47)

C. 花瓶

底部のみ出土。やや外傾気味に上方に向かう。おそらく3足であろうと思われる。外面は縦方向に削った後なでている。第1トレンチ第2層より出土。(46)

銅錢

第2トレンチ土壌1より1枚の銭貨が出土している。北宋錢の天聖元寶である。

摩滅のため、判読しにくい。直径 2.5cm、穿径 0.6cm、厚さ0.11cm、重さ 2.4g。

(48)

石製品

第2トレンチ土壤1より出土。3種類に分けられる。

1. 台座

複弁の蓮華座である。石塔の台座であるが敷石に転用されていた。花崗岩製。一部2次的に焼成を受けしており、変色している。(54)

2. 石臼

3点出土しているが、おそらく1組のものと考えられる。抹茶臼で、上臼と下臼の両方出土している。上臼の摺り目は8分画で、溝断面はV字形に近い。芯木孔は下方にむかって開く。側面には深さ36cmの柄を挿入する柄孔を穿っている。上面内側を窪ませているが供給口は欠損している。(52)

下臼受け皿部は、直線的に立ち上がるが口縁部は欠損している。臼部は削りだしで、上面に8分画になると思われる摺り目を施している。溝の断面はV字形を呈し、中央部に芯木孔を穿孔し、下面に向かってラッパ状に開いている。(51.53)

3. 用途不明石製品

断面舟形。上面に2cm幅、厚み 1.2cmの曲線を施している。欠損部が多く全形を図りることは不可能である。(50)

4. 砥石

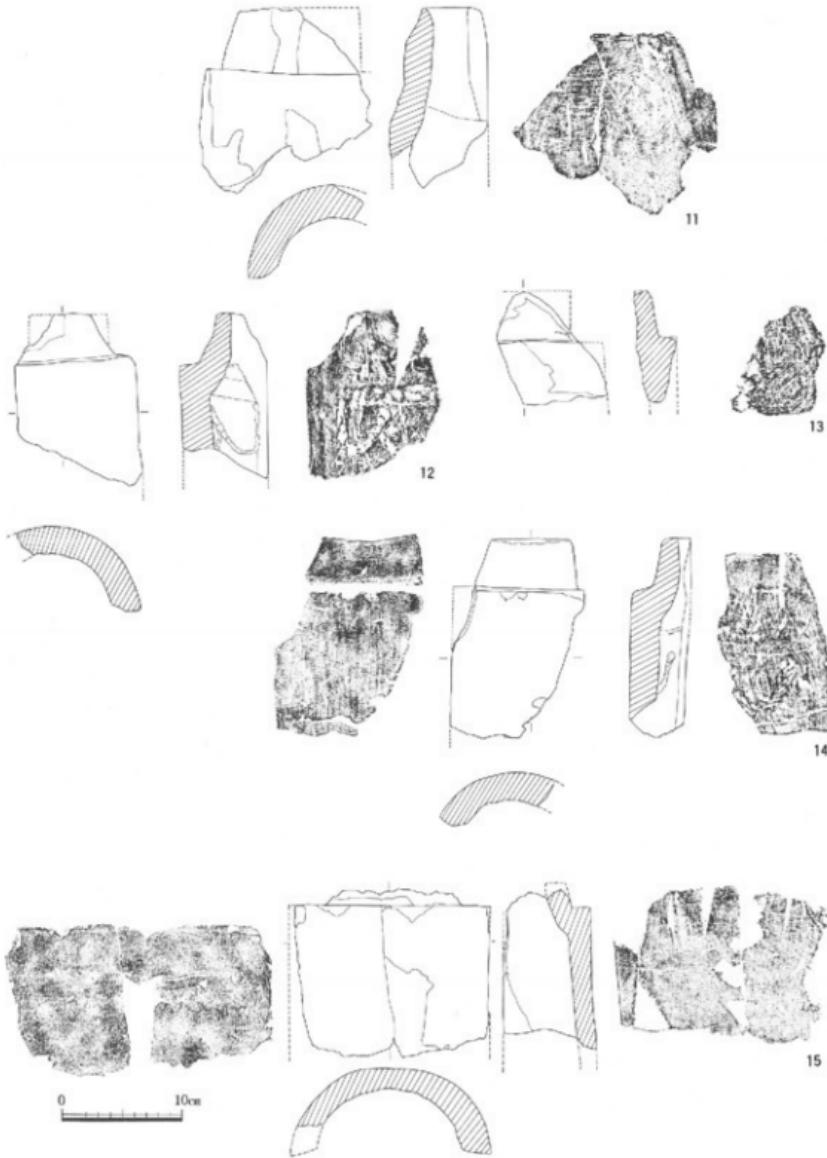
欠損する1面を除いて6面ともすべて砥石として使用。小型のもので砥石自体を動かすタイプ。朱の付着、および2次的に焼成を受けた痕跡がある。暗青灰色、シルト岩製。(49)

石器

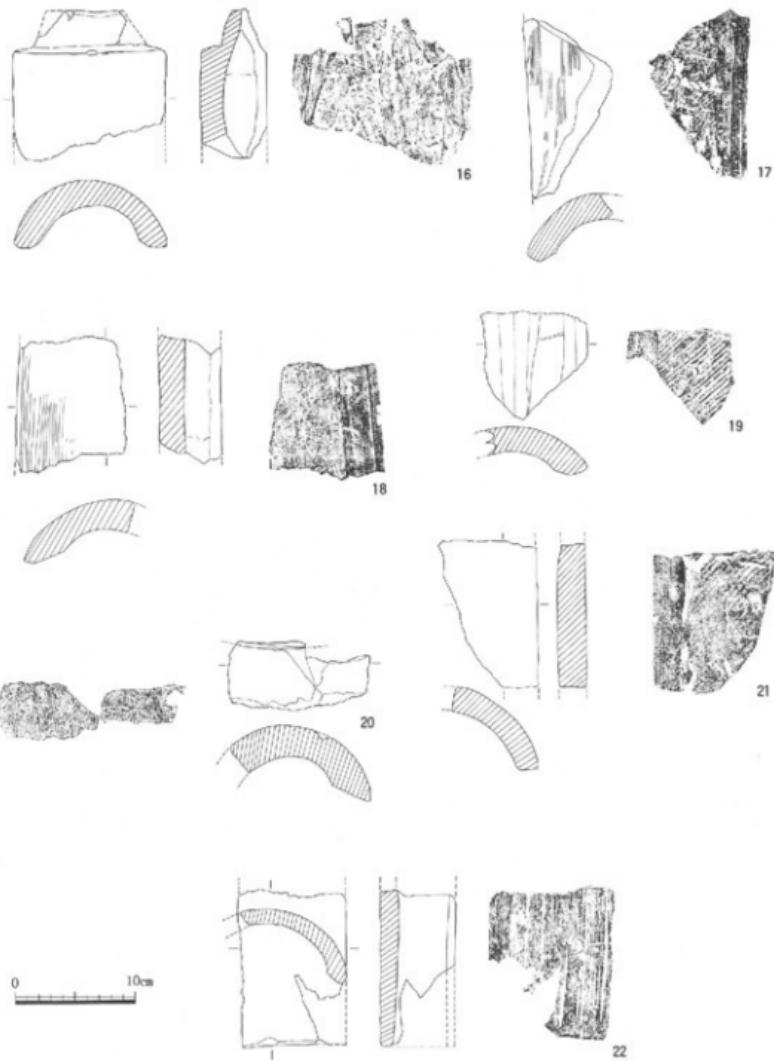
合計5点出土している。うち1点は、石鎌であるが残りは剝片である。全て第2トレンチより出土しているが、遺構内より出土しているのは(57)と(55)である。(57)は土壤1より、(55)はピット7より出土している。土壤1より出土した石器については瓦、石の投棄時に混入したと思われる。(56)はチャート製、その他はサヌカイト製である。(55~59)



第6図 平瓦・軒丸瓦・軒平瓦実測図



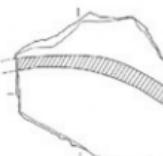
第7図 丸瓦実測図



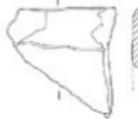
第8図 丸瓦実測図



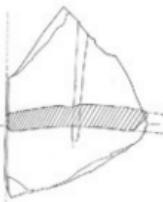
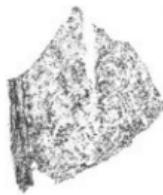
23



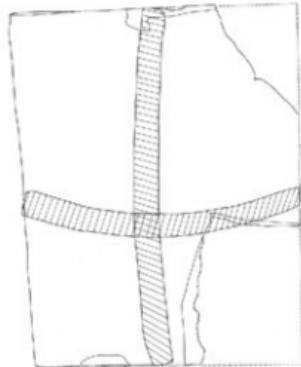
24



25



26



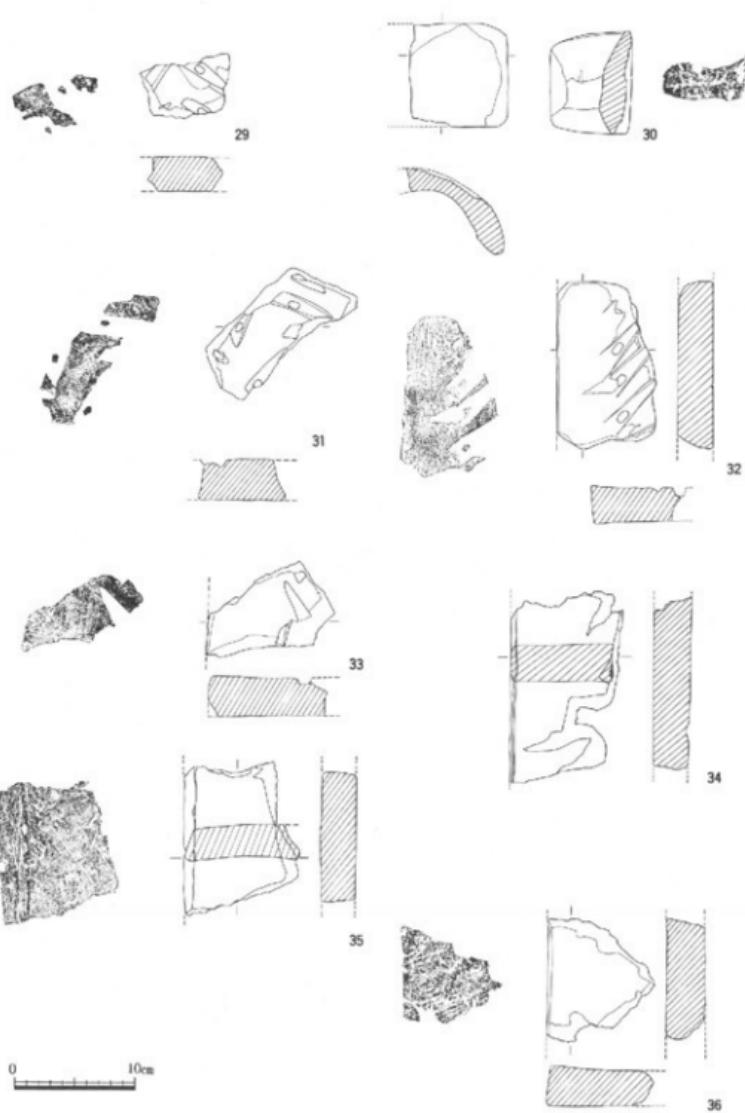
27



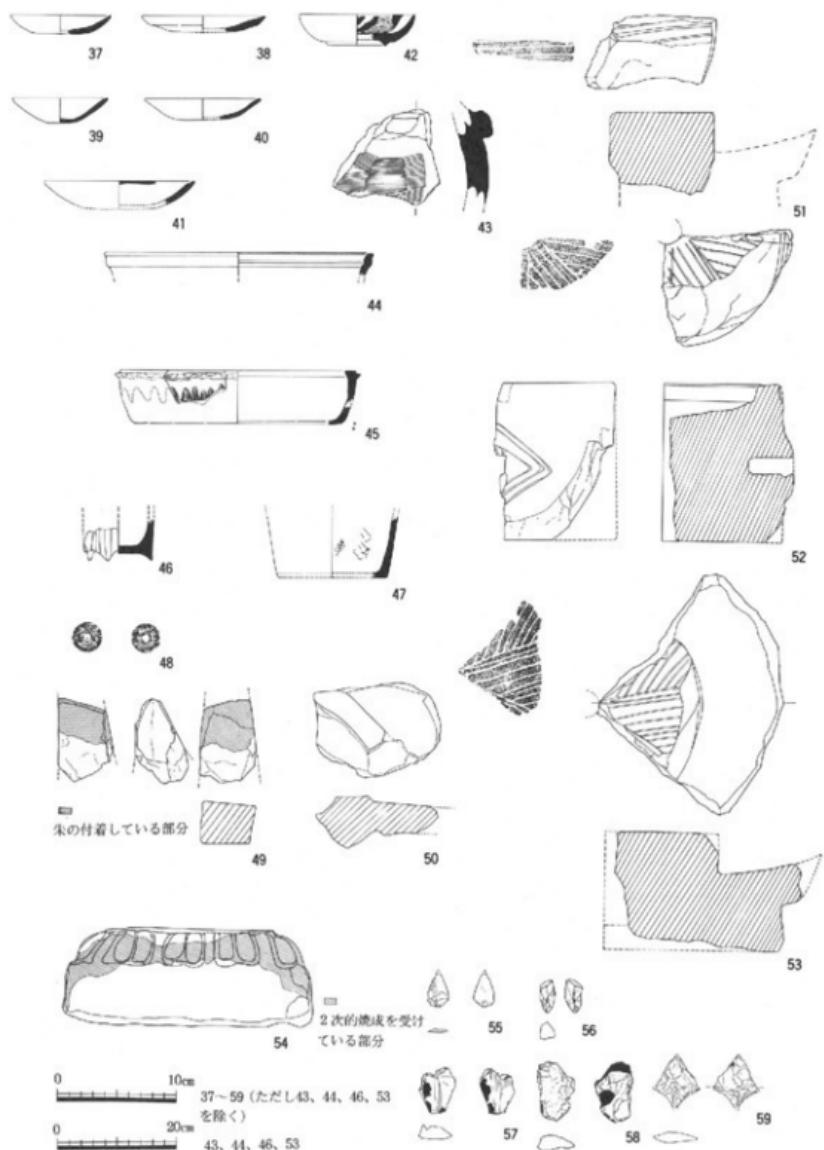
28

0 10cm

第9図 平瓦実測図



第10図 塚・面戸瓦実測図



第11図 その他出土遺物実測図

まとめ

今回の調査においては、私郭城の存在を具体的に決定づける遺構及び遺物を発見することはできなかった。しかし、本郭部の状況、あるいは私郭城の構造を復原する上で幾つかの所見を得ることができた。ここで、検出遺構について若干検討し、まとめにかえたい。

これまで本郭は数度試掘調査を行ってきたが、表土下すぐに地山層があらわれたため、当地は盛土による整地が行われたと考えるより、むしろ台地を削り込んで地盤を築いたと思われていた。が、今回の調査により本郭は場所により土層が大きく異なることがわかった。本郭は南北方向で高低差ができているが北側の一段高い部分（今回調査を行った部分）はもともと同一レベルであった地山面をわざわざ土を盛ることによって段をつくったものと思われる。また第2トレンチの東端と西端、つまり本郭の東端と中央部では地層は中央に寄るに従って下がっていくことが明らかとなった。トレンチの両端では約1mも差がある。このことは本郭を構成している地形そのものが異なることを意味する。では現在の台形状の地形は、いつ形成されたかというと耕作土と考えている第5層を客土してくる段階で形成されたことになる。この層からは石器、土師皿片、炭等が出土しているが具体的に時期を決定することはできない。

次の大規模な造成は、第2層であるが約70cmにわたって黄橙色砂質土が堆積している。この土層には直径5～10cm大の粘土ブロックがほぼ全域にわたってみられる。この土は壁土として利用されていたこともあり粒子が細かくかなり堅く締まった土である。土壙1はこの層を掘り抜く形で検出されている。造成し、均した土地の一部を掘って不要となった瓦や焼成を受けた石の類を投棄したと考えられるが、現在のところ第2層上面においてこの上部に在ったと考えられる建物跡を検出することはできなかった。炭化材や焼成を受けた石を検出していることから火災等がおこった後、きれいに整地し直しこの土壙内に一括投棄したと思われる。

また同じく第4層、第5層下部もかなりの炭化材を含んだ層であり火災等の起こったことが予想できる。昭和40年の調査時、第3郭で出土した焼けた礎石、および昭和52年第2郭北側断面掘削時にみられた焼土層との関係が注目される。今後の調査によって明らかにしていきたい課題である。

最後に、今回の発掘調査の結果の参考になると思われる光通寺の棟札（寛文4年（1664））の記録を紹介しておくこととする。

河州交野郡私部村 伏以長寿山光通禪寺者後村上天皇の御願所円光国師－（中略）
－墻壁猶存三分而有二、然兵禍繼年代猶未止、乃至信長公之時公小臣安見右近太夫
守、此地下仁無義無道賊法而破光通寺之寺壁仏閣墮地勝境威 畫桃李不成蹊空成荒
原一平宜哉、安見首領夫敵陣白刃之裏刑罰、豈避乎後人可戒也、－後略－

（1）光通寺は当私部城跡の東南の角にあたり城の出郭と考えられているが15世紀
から16世紀にかけては著名禅寺として寺の敷地も相当な規模をほこっていたといわ
れる。この記述が正しければ光通寺は安見右近によって破壊されたことになる。

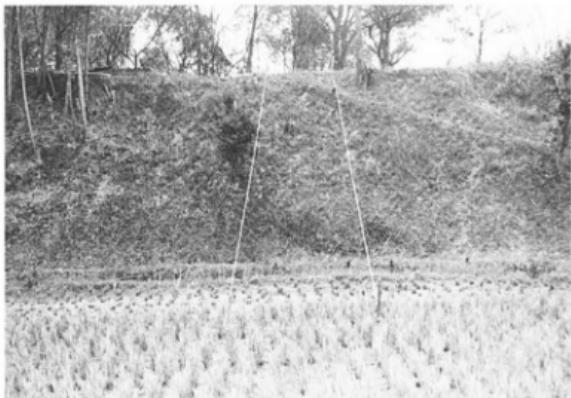
図 版



図版 1 遺跡周辺航空写真（昭和23年3月19日撮影 点線部が私部城跡）



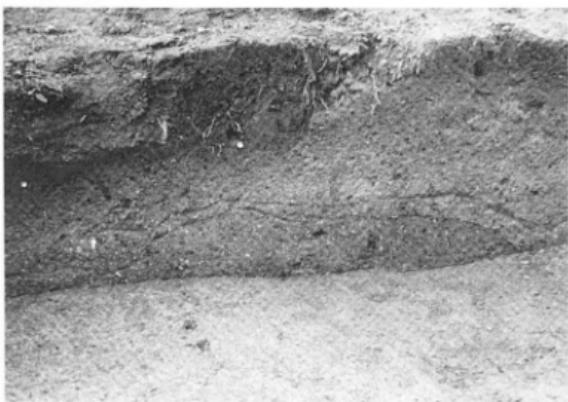
第2 トレンチ調査前風景



第3 トレンチ調査前風景



第1 トレンチ



第2 トレンチ南側断面（畝状遺構）



第2トレンチ土壤1上部遺構



第2トレンチ土壤1下部遺構



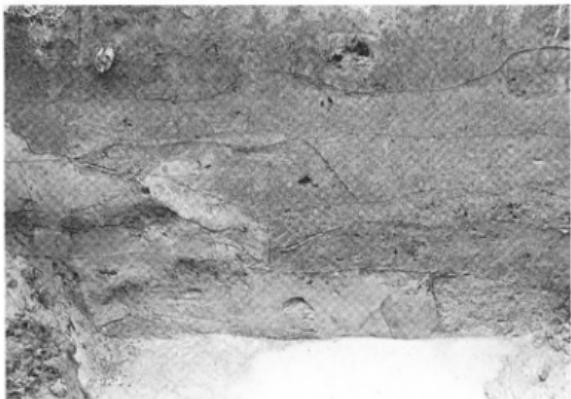
第2トレンチ第2遺構面と土壤1



第2トレンチ第3遺構面



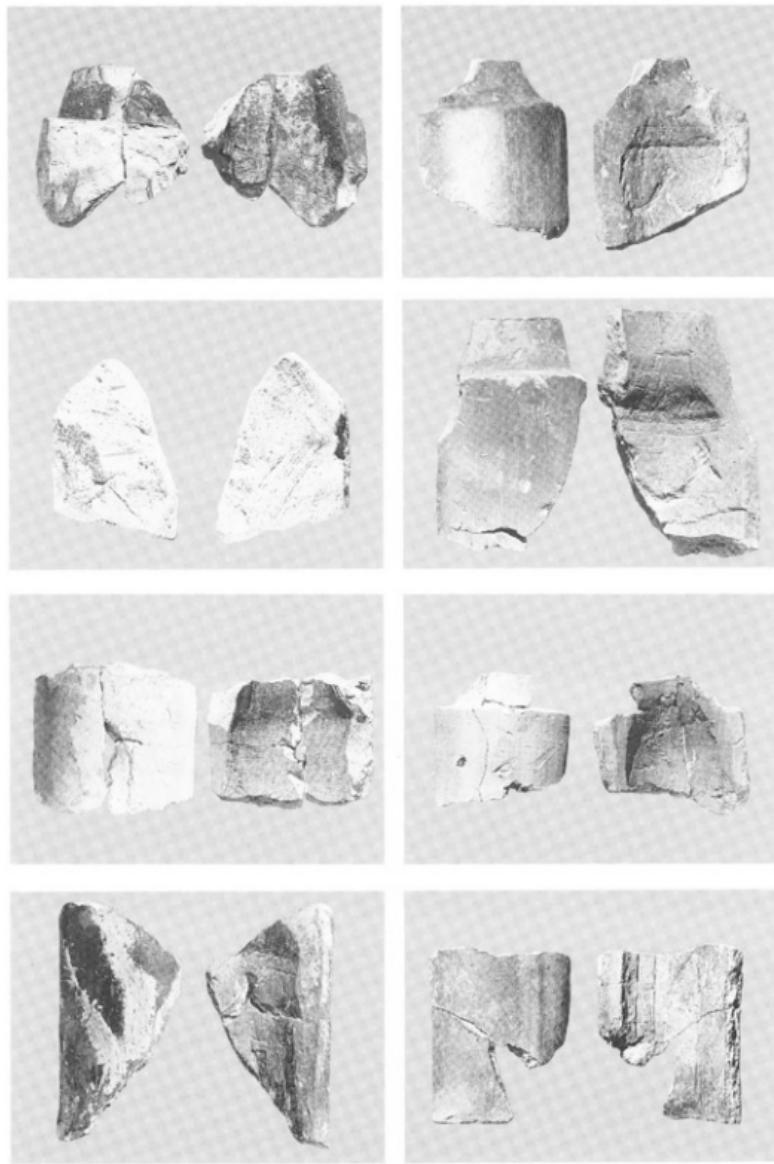
第3 トレンチ斜面部



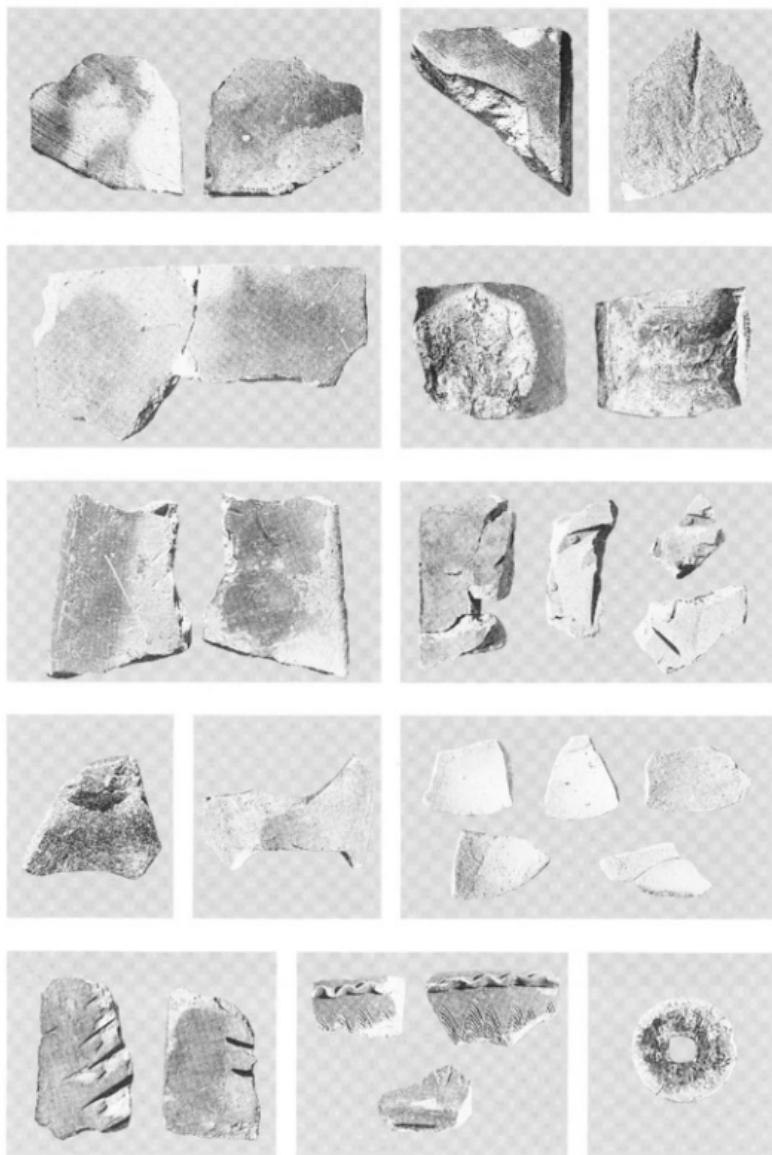
第3 トレンチ西側断面



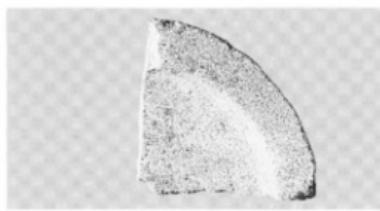
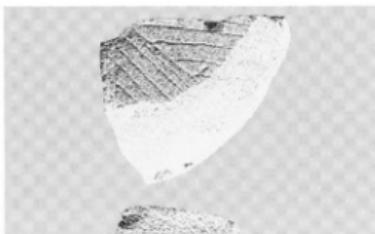
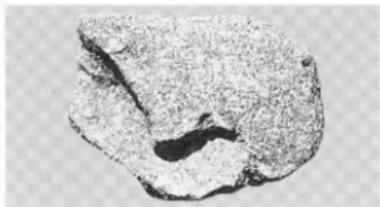
遺物写真 1



遺物写真 2



遺物写真 3



遺物写真 4

報告書抄録

ふりがな	きさべじょうし							
書名	私部城跡							
副書名	発掘調査概要報告書1							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
総著者名	小川 裕子							
編集機関	交野市教育委員会							
所在地	平576 大阪府交野市私部1丁目1番1号 瓦(0720)-82-0121							
発行年月日	西暦 1995年3月							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
私部城跡	交野市私部	27230		34 47 12	1994.12.05 ~ 1994.12.28	754.75	遺跡確認 調査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
私部城跡	城館	弥生 中世	鶴柱穴 土壁	石器（剣片・石筆） 瓦 石臼・土師器・陶磁器 石造物（達井台座）	建物（復元不可）が城と思われる層より下層で見られた。			

私 部 城 跡

—— 発掘調査概要報告書 1 ——

発 行 日 1995年 3月

編集・発行 交野市教育委員会

印 刷 株式会社 **さようせい**
